

聴覚障がい者と健常者が共存する人形劇団が各地で30周年記念公演を開催。

公益財団法人現代人形劇センターには他の劇団にはないメンバーの集団がある。聴覚障がい者と健常者が協同して人形劇に取り組む「デフ・パペットシアター・ひとみ」だ。昨年30周年記念としてユニークな演目を用意し、東京を皮切りに四国、九州、沖縄をめぐるツアー公演を行った。

人も演じる表現豊かな人形劇。

「デフ・パペットシアター・ひとみ」は、1981年の国際障がい者年（国連が指定した国際年の一つ）を契機として誕生した。現在10名の団員のうち、演じ手は6名。その半数が聴覚障がい者である。同法人の代表理事 松澤文子さんは次のように語る。

「聴覚障がい者でも楽しめる人形劇を作るということでもあり、また職業として成り立つことを証明する取り組みでもあります。福祉と文化を切り離すのではなく、同じ基

盤の上に置くというのが私たちの狙いです」

それを実現するため、この劇団にはいくつかの特徴がある。まず、音楽やセリフが演技のきっかけとなるような演目は上演しない。聴覚障がい者にわかりにくいからだ。さらに、通常の人形劇のように人間がついたてに隠れて黒子に徹するのではなく、自らが舞台上で演技を行ったり、大道具の役割をしたりと他では見られない演出になっている。

「人形劇というのは全てが作り物です。当劇団では人もモノとしてとらえる。モノとモノが演じてひとつの世界を作り上げていく。また人形を動かすだけではなく、自分も動く。だから、面白い人形劇になるわけです」。そう語るのは劇団で制作を担当している森元勝人さんだ。

もちろん、それに伴う苦労はある。意志の疎通に手話を使うため、練習は通常の3倍以上の時間をかけて行われる。外の演出家を起用する場合は、手話のできる劇団員か、演出助手が間に入って伝えなくてはならない。また、



東京で行われた公演の様子

セリフは使わず、動きが中心の構成となる。

「デフ・パペットシアター・ひとみ」は、そうした制約も当然のことと受け止め、30年間にわたって活動してきた。

地域と劇団が一体となって興業を支える。

2011年は創設30周年記念公演として、AJOSCの助成を受けて「森と夜と世界の果てへの旅」が企画された。4月8日～10日に、東京新宿にある全労済ホール/スペース・ゼロで公演し、さらに四国、九州、沖縄でも地方公演を行った。

物語はアフリカに口伝として伝わってきたものである。ヤシ酒づくりの職人が亡くなる。主人公のジュジュマンはその酒をもう一度飲みたいと考え、死者の街まで訪ねていくというストーリー。その間に会おうさまざまな現象を演じていくのだが、森元さんによれば「原作はきわめて読みにくいもので、日本の昔話のような物語性には乏しいのです。出てくるのも、悪人、病人、人でなしで、神様も自然も



聴覚障がい者がわかりやすいよう演出されている

担当者より



意義深い記念公演を実施することができました。

公益財団法人現代人形劇センター
理事長
森元勝人さん
代表理事
松澤文子さん

きりつめられる部分が少ないので、人形劇団もたいへん厳しい中での運営を迫られています。そうしたなかでAJOSCの助成金を得られ、30周年記念事業として意義深い公演を行えたことは本当に幸いでした。これからも、誰もが共存共生できる社会の創造を訴えながら活動していきたいと思っています。

同じように悪さをします。見た人の感性によって受け止め方はまったく違う」内容だという。

日本人には荒唐無稽ではあるものの、その世界観になれてくると、どんどんはまっていくという作品である。今回は音楽や映像、テロップなどを駆使し、さらにはダンスの要素も取り入れたので、老若男女を問わず、誰もがそれぞれの感性で楽しめる舞台になったという。

「人形劇というと子どもがメインだと思われるかもしれませんが、でも演劇専門家がデフの公演を見に来ると驚きます。客層というのがないのです。障がい者も老人も、女性も子どもも同じくらい見てくれる。30年間の成果として、それは自慢してもいいことだと思っています」と森元さんは語る。

興業の面でも同劇団は変わった形式をとっている。各地方の手話の青年部会や学校の教師、あるいは手話などの関連団体に働きかけて実行委員会を組織してもらい、そこ共催し、実施している。地元と劇団が団結して公演を行うことで町の中のコミュニケーションを活性化し、障がい者への理解も深め、町おこしや社会の変革につなげていきたいという狙いからだ。

地方公演は、どの町でも大成功を収め、観客からは「また見たいから、ぜひもう一度来てください」という言葉ももらった。そうした声をまた聞けることを夢見て、劇団はいま次の作品に向けての猛練習を行っている。